

タイトル 『ゴルゴダメール』 作 篠原 久美子

登場人物 男6人、女6人

山室亮一(三十三) 演出家
藤崎透(三十三) 会館職員
白川優希(二十七) 演出助手
田宮義弘(二十八) 舞台監督
阿久津未歩(二十八) ピアノの調律師。高機能自閉症者の自立支援の会「くじらっ子クラブ」会長。自閉症者
加勢直也(二十六) 大学院生。数学の学術書などの下訳している。「くじらっ子クラブ」の事務局長。自閉症者
堀江秋菜(二十二) バイク便のライダー。自閉症者
新原順平(十八) アクセサリー工房のバイト。自閉症者
石井可南枝(二十五) 会館非常勤職員
真鍋貴(二十八) 公務員・鯛焼き屋
真鍋理美(二十五) 看護師・貴の妻
奥田胡子(ここ) (十八) 高校生

場所

東京近郊の都市にある、青少年会館。市と「くじらっ子クラブ」の共同企画で、高機能自閉症者と一般の人が一緒に芝居を作る、その稽古場。稽古場には更衣室がある。

大勢でいるシーンでの台詞は重なっている。

劇中劇は、全て劇中の役名で書かれている。

劇中の演出家によるサゼッションは、その場で実際に俳優に起こったことに対して言っていたいかまわらない。山室亮一のダメ出しの台詞通りにやろうとして俳優の演技が作ったものになるよりは、むしろ俳優の演技に合わせて演出家の台詞の方を変えてもらった方がいい。

舞台には三つのドアがある。舞台奥、廊下から稽古場に入るドア、更衣室に入るドア、稽古場と更衣室をつなぐドアの三カ所。俳優たちはそれぞれ、特に台本に指定のないときでも更衣室を使うことがあっている。

【第一場】

1 ワークショップ

暗闇の中、言葉がある。

優希　はじめに、「光あれ」と神が、どんな神様でもいいんですが、言いました。
全員　（それぞれに、バラバラに）光あれ…

チャッカマンの火が点き、ろうそくに灯がともっていく。優希、九個（亮一、透、優希が入っていない）のろうそくに火を灯していく。透はビデオ撮影をしている。

優希　これは、あなたの言葉が生み出した、あなたの世界の最初の光です。あなたの言葉から生まれたばかりのこの小さな光と、あなたのからだで話してみてください。ろうそくを動かしたり、火に触ったりはしないでくださいね。

それぞれが、光と会話を始める。
順平は膝を抱えて火を見つめて動かない。

亮一　なにやってんだ！

亮一が止めたのは、秋菜。近づきすぎた秋菜の左手を火から離れたのだ。

優希　明かりを！

透が部屋の蛍光灯を付ける。
ほとんど全員が光との会話をやめるが、順平はまだろうそくの光の前に座っている。急な光で未歩の目が見えなくなっている。だが、それはここではことさら注目されない。

すぐ冷やしてください。

やけど？

大丈夫ですか？

赤くなって。冷やさなきゃ。

秋菜　ろうそくの火って、声、小さいじゃないですか。気まぐれな子だし。まあ、そこが可愛いんだけど、ふわんって急にしゃべり始めるから…

亮一　冷やしてください。

優希 (秋菜を促し) 行きましょう。

理美 私行きますよ。

優希 でも、

亮一 理美さん、お願いします。

透 一階の事務室に救急箱ありますので。

理美 分かりました。

優希 すみません。

秋菜 全然大丈夫なのに。

理美 行きましょ。

亮一 (全体に) 休憩しよう、五分。みなさん、ろうそくの火は消して下さい。

義弘 じゃ、あの時計で…二十五分まで。

理美と秋菜、出て行く。

それぞれ休憩する。未歩は動かない。

透 火を使うのは、やめませんか？

優希 すみませんでした。

亮一 あとさ、あんまり神様とか出さないでくれるかな。あんま好きじゃないん

だ、おれ、そういうの。ここ、公共の施設だし。

優希 そんなつもりじゃなかったんですけど、すみません。

亮一 片づけて。

優希 はい。

義弘 (優希に) いいですよ、こっちでやりますから、

貴 手伝うわ。

義弘 サンキュ。

貴 はい、どいてね(火を消す)

順平 消さないで下さい。何で消すんですか。

貴 いや、危ないって今…

順平 危なかったのは、あの人一人でしょう。なんで他の人たちまで消されなき

やいけないんですか。予定通りやって下さい。

優希 ごめんなさい、でも、

可南枝 ちよつと、イス。未歩さん、また目が見えてない。

義弘 あ、電気か！

可南枝 急に点けたから。大丈夫ですか？

義弘、未歩に椅子を持ってきて座らせる。

直也がケータリングのコーナーで飲み物を入れている。未歩のマイカッ

プにストローを差して、会話の間に未歩の所に持っていく。(二つの場

所の会話の重なり方は、必ずしも台本の通りでなくてよい)。

優希 順平君、ごめんなさい、ちょっと未歩さんが、
順平 今、あなたが話しているのはぼくでしょう。少し、落ち着いて人の話を聞
きなさいよ。

優希 すみません。

可南枝（未歩に）大丈夫？

未歩 うん。目が見えなくなっただけだから。

順平 ワークシヨップのリーダーはあなたでしょう。

貴 他は、もう消しちゃったし。

順平 何で消すんですか！

胡子（未歩の目をのぞき込み）うわぁ、目、ホント変になってる。

未歩 いやいや、すぐ戻るから。

直也（コップを差し出す）はい。オレンジジュース。

未歩（手探りで受け取り、ストローを確認して）ありがとう（飲む）。

貴 いや、消してって言われたから。

順平 だれに？

貴 いや…山室さん…、演出に、

順平 言われたからやる。そういうのをお役所仕事って言っんです。

貴 なんだそれ？

優希 ごめんなさい。私が悪いんです。火を使ったのも、計画を変更したのも、

ホント、すみません、

あなたは謝りすぎです。

順平（思わず）ごめんなさい。

優希 飲み終わりました？ カップ、もらいましょうか？

可南枝 いや。くぼみ、落ち着くんで、触ってる。

未歩 ろっそく、これに回収してくれる。

義弘 あ、はいはい。

貴 手伝います。

直也 勝手に持って行かないで下さいよ。

順平 危ないから（消す）。

義弘 あー。ぼくは危なくなかったのに！

順平（順平に）これは決まりです。

直也 そんな決まりはありません！

順平 決まりが変わったんです。

直也 誰が変わったんですか。

透 ぼくが変えて下さいってお願いしました。

順平 勝手に変えないで下さい。

直也 決まりは変わることがあります。変わった場合は後からできた決まりが有

効です。

順平 役所の決まりは、勝手に変わるんですか。

透 場合によってはそうです。

貴
（義弘に）正直つすね、藤崎さん。
順平
ひどい。官憲の横暴だ。
貴
すごい言葉、知ってんな。

順平はやや混乱してコーナーに座り込む。
優希は順平の側に行く。

胡子
（未歩の瞳をのぞき込み）わ、わ。戻ってる、戻ってる。ほら、瞳に光が戻
ってくるのが分かる。

未歩
おいおい、あたしゃ見せ物か。

胡子
おもしろー。瞬間的に全盲になれるって、ある意味、すごい特技だよな。

未歩
特技って言うなよ。

胡子
それってどんな感じ？

未歩
目の前が真っ暗になるって感じ。

胡子
まんまだね。

未歩
ごめんよ、芸がなくて。おお、見えてきた、見えてきた。

胡子
おー（拍手）。すごいなー。目ってホントに明かり強すぎても暗すぎても

見えないんだね。

義弘
（ろうそくを）集めた？ じゃ、こつち。

貴
ほーい。

優希
（順平に）なに話してたの？ そんなに夢中で、ろうそくと。

順平
ろうそくの光と？

優希
うん、ろうそくの光と。

順平
（優希のまねで）はじめに、「光あれ」と神が、どんな神様でもいいんで

すが、言いました。みなさんの言葉で、光がありました。

優希
すごいね、順平君。すぐ覚えちゃうんだ。

順平
ということは、言葉よりも先に、暗闇があったってことですよな。

優希
え？

順平
世界に最初にあったのは、闇です。

優希
そうね。そうだね。山室さん。

亮一
なに？

優希
順平君、今のもう一回、聞かせてくれますか？

順平
はじめに、「光あれ」と神が、どんな神様でもいいんですが、言いました。

みなさんの言葉で、光がありました。ということは、言葉よりも先に、暗

闇があったってことです。世界に最初にあったのは、闇です。

亮一
へえ、面白いね。

順平
ぼくは「からだで会話」ができませんでした。どう考えても、ぼくの体は

しゃべりません。だからきくとそれは心の中で言葉で光に呼びかけるとい

うことなのだと思うって呼びかけてみました。ひかり、ひかり、ひかりって。

でも途中で、しまった、と思ったんです。ぼく、すっかり、新幹線を呼ん

じゃったかもしれないと思って。どうしよう、新幹線が、ここに来ようとしたら…

亮一 確かに、ここに新幹線が乗り入れてきたら、かなり困るね。

順平 いや、論理的に考えてそんなことはありませんよ。線路がないんですから。でも、電車って、「来い」って呼ばないと来ないですよね。

未歩 (座ったままで) 順平は子供の頃、事故で電車が遅れたときに友達に言われたことがあるんだって。「電車を呼ぶ念力が足りない」って。

順平 そうです。それ以来、ホームに立つと電車を呼ぶんです、念力で。すると必ず来るんです、電車が。

亮一 呼ばないと来ないのか？

順平

分かりません。呼ばないでいようと我慢することもあるんです。でもそれでちょっと電車が来ないと不安になって呼んじゃうんです。すると来る。だからさつきも心配になったんです。新幹線がこう走ってますよね。それでその途中でぼくの念力を受け取って、ふつと気をそらしたとしますよね。そしたら、脱線するんじゃないでしょうか？

……しないとと思うよ。

亮平

でもぼく、念力強いですよ、妖怪だから。

順平

(小声で) よくまともに聞いているな、あんな無茶苦茶な話。

義弘

あ、いや…

順平

ぼく、もう話しません。

優希

順平君、

優希さん、言いましたよね。演劇に正解はありません。だから演劇の現場では何を話してもいいのです。こんな馬鹿なことか、変かなと思うことでも、何でも話してください。もちろん、人をけなすようなことはダメですけど。

貴

(箱) これ、そっちに持ってけばいい？

義弘

あ、うん、それで。

順平

ぼくの言ったことは馬鹿なことなのかもしれません、でも、

優希

順平君は妖怪なの？

順平

ぼくはけなしていません。(妖怪に対して) そうです。でも妖怪といっても悪いことはしないですよ。いいことをして、早く人間になりたいんで。

亮一

妖怪人間なのか、順平君は。

順平

はい。ベム、ベラ、ヘロ、順平、です。

この少し前に秋菜と理美が戻ってくる。秋菜は手に包帯をしている。

直也

(秋菜に) 大丈夫？

秋菜

全然だいじょうぶ。理美さんが大袈裟なんです。

胡子

うわ…

貴

やってもらってその言い方はないんじゃないの。

理美

いいから。

貴

だって…

理美

いいの。

秋菜

「ろっそくの火、消しちゃったんだ。

はい、この人（亮一）が消して下さいと言って、あの人（貴）が消しました。」

未歩

順平、それはもういいから。あたしも自分、魔女だと思ってたよ。直也、

宇宙人だっけ？

そう。なんかこの世が作り物みたいに思えていました。この世で起こることとは宇宙人がみんな見ていて、シナリオを通信してくるんだとか思ってたよ、子供の頃。

直也

理美

その感じはなんかちょっと分かる気がしますけど。

直也

ホント？ 分かる？

理美

分かりますよ。空から誰かに見られてる感じですよね。

直也

ホントですか？ 理美さん、生年月日はいつですか？

理美

え、なに？ 十月三十日だけど、八三年の。

直也

一九八三年の十月三十日は日曜日です。

理美

すごい、何で分かるの。

貴

変だよ、それ。

理美

貴。

直也

すみません。

未歩

それだ。うちら子ども頃からなんか言うたびに、「それ変だよ」って言われすぎちゃってさ。自分は普通の人間じゃないんじゃないかと思いつつ、いやったんだよね。妖怪人間、魔女、宇宙人。秋菜なんか罪人だよ、な。

秋菜

あたしはこの世に罰を受けるために生まれてきたから。

優希

秋菜さん、そんなことあるはずないから…

未歩

あ、なんかそんなまとも心配してくれなくても。今、慣れてる最中だから。

直也

そうなんです。その…何と言えばいいか。子供の頃から、こう、みんなと仲良くなりたいのに、いつも人とズレたことばかり言ってしまうって、いじめられたりしてきて、きつとほくは、宇宙人なんだと思っていたんですよ。それがアスペルガー症候群って診断されて、ああ、そうか、そういう脳の特徴を持って生まれただけの、地球人なのかって。最近、その概念に慣れていくこうしてるんですよ。

未歩

そうそう。あたしや魔女が醜いアヒルの子だけ、と思ってたけど、なんだあたしも人間だったんだーって。

亮一

そっちのが全然、面白いくちな。魔女とかのが。

優希

秋菜さん、手、大丈夫ですか？

理美

一応、念のため包帯しましたけど、たいしたこと無いですよ。

亮一

じゃ、ちよっと丸くなるうか。全員で。

義弘

ほあい。

亮一

(引き留める目的で)藤崎さん、

透

私はビデオ撮影を…

亮一

逃げない。全員で、ですから。

透

はい。

亮一

え、とね、さつき、ちよっとの時間でしたけど、皆さんに、ろうそくの光と会話してもらいました。で、順平君が、すごく面白いこと言ってくれて。世界に最初にあつたのは闇だっというんだよね。で、その闇の中から言葉が生まれたと、

秋菜

寂しかったんだ。

亮一

え、なに？

秋菜

神。そんな暗闇の中で一人、鎮座ましましてるから寂しくなるんだ。だから言葉を生んだんだ。

亮一

…面白いですね。秋菜さんも順平君もすごくいい。世界ははじめ、暗闇だった。暗闇の中に神の寂しさがあつた。そこで神は言葉を発した。「光あれ」。うん、すごく面白い。なんか哲学的だな。じゃ、次は何だろう。光の次は。

順平

こだま。

亮一

新幹線じゃない方がいいな。

義弘

でもそれいいんじゃないですか。光の次は音って、なんかいいですよ。

亮一

何の音？

理美

波、とか？

亮一

いいなあ。世界には最初、暗闇があつて、神の寂しさがあつて、言葉があつて、光が生まれて、光の次に音があつて、波が生まれた。次は？ 波の次は何だ？

胡子

海とか？

亮一

海、いいね。

理美

風？

亮一

風が生まれた。次は？

貴

火とか、ダメですか？

亮一

いいですね。火、一気に進んだ感じだね。それから。

胡子

あと雨。雨乞いで火、たいて、雨になるとか。

亮一

科学だな。それから。

直也

シナリオ。科学が発達したから、遙か遠く離れた星に住む宇宙人が書いてるシナリオがメールで届く。

順平

ぼくは巨人がコントローラーで人を動かしてると思ってた。

未歩

それさ、「運命を感じる」とか言って言い方した方がいいよ。「宇宙からメールでシナリオが届く」とか「巨人のコントローラー」とか言つと、気味悪がられるよ。

順平

ぼくは人生に運命を感じます。

理美 私は個性的で面白いと思いますけど。

直也 ありがとうございます。

亮一 ほかにもそういうふうを感じることもあるよ。「この世は舞台、人は皆役者」だからね。でも、運命つてのも、それはそれでなんかすごいところに辿り着いた感じだな。じゃ、最初から、繋げてみようか。世界ははじめ「(まるまる)」だった。そこには「バツバツ」があった。そのバツバツから「三角三角」が生まれたって感じて順番に、前の人に繋げていこう。分かりますか？ じゃ、こつちから。(指定されている以外は輪になった順番で。)

亮一の右一 世界は、はじめ、暗闇だった。

二 暗闇の中には、神の寂しさがあつた。

三 暗闇の中の神の寂しさから、言葉が生まれた。

四 神の寂しさから生まれた言葉から、ひかりが生まれた。

五 言葉から生まれた光から、波が生まれた。

六 光から生まれた波から、海が生まれた。

七 波から生まれた海が、風を生んだ。

貴 風から…あれ？ なんだっけ？

秋菜 火だよ。

貴 そつだ。火が…あれ？

秋菜 風で、その前が海。

貴 …どうも。海、から生まれた、風から、火が、生まれた。

亮一 (無言でオツケー)。

九 風から生まれた火から雨が生まれた。

順平 「まるまるから生まれたバツバツから三角三角が生まれた」。

亮一 次の人、続けて。前とつなげて後ろに渡して。

十 火から生まれたまるまる、バツバツ、三角三角から雨が生まれた。

亮一 素晴らしい。(次)。

十一 えつと、…あ、雨から…シナリオが生まれた？

亮一 いいよ、出たもの全部言つていい。

十二 雨から生まれたシナリオから、宇宙人が生まれた。

十三 シナリオから生まれた宇宙人から、巨人のコントローラーが生まれた。

亮一 シュールだなあ。よし、最後。

十四 宇宙人から生まれた巨人のコントローラーから、運命が生まれた。

亮一 はい、全員一緒に、ベーターベン！

全員 ジャ、ジャ、ジャ、ジャーン！

亮一 素晴らしい！ じゃ、決まったところで、今日のキーワードは「運命」にしよう。運命を意識して、昨日と同じシーンをやってみよう。

舞台の準備。

義弘 はい、じゃ、昇降口の所からやりますので、各自準備に入ってください。

貴 手伝うよ。お、みんなでやるうー。

直也 (準備された机を直し) 曲がってます。

義弘 どうも。

直也 どういたしまして。

尚、この間、順平がいつの間にか抜けて更衣室に入る。

胡子がそれを見つけて追いかけて更衣室に入る。

更衣室。

胡子 順平君、帰っちゃうの？

順平 はい。

胡子 あのさ、あたしのこと、覚えてる？

順平 ……(質問の意味が抽象的で把握できない)。

胡子 あ、あの、小学四年のとき、同じクラスだったんだけど。市立二少で。ほら、…四年二組、出席番号六番、

順平 出席番号六番、奥田胡子さん。誕生日、十二月十六日。

胡子 そう！ やっぱ順平君だ。ワークシヨップいっしょになってからずっと言いたかったんだけど、あのさ…ごめんね、昔。ほら、順平君、急に引越しちゃって、悪いなと思ってただんどずっと、

順平 引越しちゃわないですよ。施設に入っただんです。両親がどっちもぼくを引き取りたがらなかったから。

胡子 ……そなんだ。今も？ あ、施設。

順平 そうです。施設に入っただけは幸せでしたね。

胡子 そのの？

順平 施設はルールがいっぱいあって、みんな、守るから。家族はだめだね。ルール守らないから。家庭が一番住みにくい。

胡子 そっか。今なにしてるの？

順平 着替えてる。

胡子 じゃなくて、学校。仕事とか。

順平 アクセサリー作ってる。じゃ、ぼく帰るから。

胡子 うん。あのさ、小学校の時のこと、ここでは言わないでね。お芝居の人たち。

順平 言わないよ。

胡子 ありがと。

稽古場。

義弘 じゃ、準備よかったら、行きます。

直也 (バミリのテープを直す) 曲がってます。

義弘
直也
亮一
ありがとう。
どういたしました。

じゃ、昇降口の前、アリサの独白から行こう。アリサが教室で苛められてナギサにかばってもらった後、変光星との通信のところから、続けてみましょう。

それぞれ、返事。

胡子がそつと更衣室を出て、準備に入る。

順平が更衣室から出て、稽古場から外に出ようとする。

義弘
順平
え、順平君、ちよつと待って。帰るの？

はい、門限は十時ですから。

金曜日は一時間後ろにずれてるんだけど…。

順平くん、みんなでいっしょにやってるんだから、それはないでしょー。

だいたいだめだよ、その年で親の決めた門限守ってるよーじゃ。

いいよ。順平君、またあさつて、来てくれる？

はい。お疲れ様でした（出て行く）。

亮一
順平
お疲れ様でした。

みんな、なんとなくそれぞれ、「お疲れ様でした」を言う。

貴
透
亮一
大物だなあ。親、そつと過保護に育ててるよ、あれ。いいんですか？

保護者の方にはお願いしておきます。こちらの連絡不足でした。

まあ、ちよつとずつ言っていきましょう。あんまりいっぺんに言つと混乱

するみたいだから。貴さん、順平君の代役、頼んでいい？

はい。山室さん、あいつ、甘やかし過ぎですよ。ガツンと言つてやりやい

いんですよ。

義弘
板付き、いいですね。止めずにいきますので、役者さんは、バミリのテー

プとか曲がってるのに気がついてても、絶対に直さないで下さい。いいです

ね。

それぞれが返事。

義弘
亮一
（亮一に）オッケーです。

じゃあ、アリサの気持ちができたとこで、理美さん、始めて下さい。どつぞ。

アリサ役が理美、ナギサ役が秋菜。女子生徒は1が胡子、2が可南枝。
男子生徒は1が順平の代役で貴、2が直也。

アリサ M³の星、Sへ。アリサは今日もシナリオ通りみんなから苛められました。上履きはどぶに捨てられ、授業中はずっと後ろからコンパスの針で突き刺され、給食にはぞうきんの絞り汁を入れられました。それを食べずに残したら、先生から「わがままで偏食をしてはいけない」と叱られました。そこまではいつも通りですが、今日、ナギサさんが急にみんなに「やめなよ」と言ってくれました。いったいどうしたのでしょうか？ なぜナギサさんはアリサを庇ったのですか？ これもシナリオにあるのですか？ ARISA A（アリサ）と名前をローマ字で書けばそこにはARASI（嵐）が隠れています。名前に運命づけられて、アリサが動けば必ず嵐が起ります。ナギサのナギは嵐のやんだ海の凧。そうだとすれば、二人の名前のしっぽにある「サ」の一字は、交叉のサではないでしょうか？ 嵐と凧が交われば、嵐の海も静かに凧いでいくのでしょうか？ 希望を持ってもいいですか？ シナリオは変わることができますか？ M³の星、Sへ。ゴダの星から、Aより。

義弘

暗転。雨音入ります。∴昇降口に明かり、入りました。

雨音。（音は優希が出している）。

昇降口。

ナギサが立っている。

アリサが来る。傘立てから傘を取る。

ナギサ 傘、持ってるの？

アリサ うん。

ナギサ 入れてくれる？ 駅まで。

アリサ あ……（傘を出す）持っていいよ。

ナギサ え？ 二本あるの？

アリサ ううん。いいの。ナギサさんに使ってもらいたいから。持ってって。

ナギサ いいよ、そんな。一緒に入れてくれれば。

アリサ ううん、持ってって。

ナギサ アリサさん、どうすんの？

アリサ 大丈夫。お母さんに電話して、持ってきてもらうから。

ナギサ そんなの変だよ。いいよ、そんなことなくて。

アリサ 大丈夫だから、お願い、使って。

ナギサ もっ、いいよ。

生徒たちが来る。

女生徒1 あれ、ヘンコウセイが仲間割れしてる。

ナギサ 仲間じゃないよ、別に。ね、傘、入れてくれる？

女生徒1 いいよ。

アリサ お願い、あたしの傘を使って。お願い！

男生徒1 なにこいつ、頭おかしいんじゃない？

アリサ ナギサさんに使って欲しいの、お願い。

女生徒2 キヤー、きもい。近寄らないでよ。

ナギサ 泣かないでよ。あたしが苛めてるみたいじゃない。

アリサ 待って。ナギサさん、一緒に、傘に入ってもいいです、あたし。我慢します。

女生徒1 なにその言い方。

女生徒2 信じらんない。

男生徒1 お前、何様だよ。

直也 (傘立てを直す) 曲がってます。

亮一 続けて。

ナギサ もついいよ。

女生徒1 ナギサは、あたしと帰るんだよ。行こう。

女生徒2 寄らないでよ、ゾーキん臭い。

男生徒1 ノーミソまでゾーキんなんじゃないの。

男生徒2 泣いてんじゃねーよ、ゾーキん。

女生徒2 シネ、ばーか。

雨音。

3・サゼツション

亮一 はい、止めます。

貴 (直也に) お前さ、やるなって言われたことはやるなよ。

優希 ごめんなさい、貴さん。直也さんはやるなと言われたことはやってないんです。直也さん、お芝居をしている最中にはバミリだけじゃなくて小道具

も動かさない。それと、台本にないことは言わないって約束してもらえますか？

直也 はい。すみません。

貴 あやまりやいいと思ってんだろ、お前、今まで何回、やったよ。

未歩 ごめん、貴さん。でもアスぺの場合は、

義弘 解説しなくていいですよ。

未歩 は？

義弘

アスペルガー症候群にはこういう特徴がありますって解説してもらっても、正直、イライラしなくなる訳じゃないです。いいですよ、解説なしで、対処だけしてもらえた方が、現場としてはありがたいです。ぼくは覚えましたが、もう絶対にしませんから。

直也 貴

にやにやしなから謝んなよ。違うだろ。対処するとか覚えるとか、それじやマニユアルじゃなか。マニユアルじゃないでしょ、芝居は。おれは、女房（理美）に誘われて、アマチュアで何回か舞台に立ったただけだし、芝居の醍醐味っていうのは、コーユー（手で表す）なんか、こうみんなの一体感なわけでしょ。覚えりやいいとか、対処できればいいとか、そここじゃなくてさ、お互い人の気持ち考えて、場の雰囲気作ってさ、みんな協力してその場を支えるのが芝居だろ。もっとちゃんと空気読んでさ、いい雰囲気、作ってごうよ。ね。

理美

（小さく）もうやだ…

義弘

貴はなにも間違ったことは言っていないと思っけど。

未歩

（明るく）あのさ、あたししゃ、解説したいだけで、間違ってるとか、全然、そついうことじゃないから。どちかっていうと、歩み寄りたいうって感じ。お互いに。

貴

そうだよ、それだよ、俺が言ってるのは。

未歩

（明るい）だよね。

貴

な。ほらみる、ここは分かり合ってたんだよ、な。

未歩

（明るく）いや、かなり遠いんで。うちらは、子供の頃からどうしたら変な子って言われなかつて、必死で歩み寄ってるわけさ。なんで（だからの意）、普通の子の方でもちよつと寄ってきて欲しいわけ。うちら、ま、自分では自閉っ子とかアスペとかアスピイとか呼んでんだけど、それってコミュニケーションの「障害」なんだ。生まれつき目が見えない人がいるように、うちらは生まれつき空気とか雰囲気とか読めない脳の構造を持つてて、ズレた発想しかできない訳よ。心の病気とか親のしつけとか全然関係なくて生まれつきだから、治せないわけ。目が見えない人に見えるようになれって言わないでしょ。だから空気読めるようになれって言わないで欲しいわけ。そのかわりものすごく頑張つて、うちらはマニユアルとか記憶とか総動員して、普通の子たちが「普通、言わなくても分かるでしょ」ってことを分かるように努力するわけ。だからパターンを覚えるまで待つて欲しいんだわ。

直也

「くじらっ子クラブ」を作ったのも、こつこつお芝居とかを企画するのも、一つには解説して理解してもらいたいうつがあるんです。ぼくらは、子供の頃から、「もつと人の気持ちを考えろ」ってずつと言われてきました。でも、ぼくらは魔女や宇宙人じゃなくて、人なんだって分かったんで、「ぼくらみたいな人の気持ち」も考えてほしいんです。

未歩

そ。だから解説やめないけど、いいかな？

貴

理解し合うのはいいことだよ。お互いが努力しないと。ねえ。

理美 未歩さん、解説してくれますか。
未歩 はいな。

理美 このお芝居って、基本的に、未歩さんの体験ですよな。
未歩 ま、そだね。結構みんなの混ざってるけど。変な転校生でヘンコウセイツっていうのは直也。星好きだから。

直也 アンドロメダ銀河M³1にケフェウス型変光星があります。

理美 直也さんって、ホントに何でも詳しいね。

直也 そうでもありませんけど…。

理美 あ、それでこのシーンなんですけど、私、分からないんですけど、アリスって、ナギサと一緒に傘に入らないとか、なんでこんな不自然なことしちゃうんですか？

未歩 あ、これはね、ほら、雨って痛いじゃん。

理美 え？

亮一 なんですか、それ？

未歩 みんな、我慢強いからいいけどさ。あたしゃ、こつみえてもみんなより軟弱だから、

義弘 未歩さん、雨は痛くないですよ。軟弱とかそういう問題じゃないです。

未歩 痛いでしょう、雨は。毛穴に当たると、針で刺されたみたいに痛むでしょ。

何人が ええー？

胡子 痛くないよ、雨は全然、痛くない。

未歩 え、嘘？ ええ？ 直也は？ 秋菜も？

直也 痛くないですね。雨は水滴であつて金属ではありませんから。

秋菜 あたしも雨は痛くない。

未歩 え？ ……うっわー！ ……うっわー！ 今、目から鱗、百枚くらい落ちたぞ。

え？ ……うっわー！ ……うっわー！ 今、目から鱗、百枚くらい落ちたぞ。ずつるー。みんな、なんて、楽に生きてんだよー。うっそ、雨、痛くないなんて、そりゃ、生きてて楽だろ、お前ら。あー、あたしも雨が痛くない人生、送ってるよあー。

亮一 えつと…。つまり未歩さんは、や、アリスは、二人で傘に入ると雨に当たって、針で刺されるみたいに痛いから、ナギサを傘に入れなかつたぞ。

優希 これ、理美さんが聞かなかつたら、だれもアリスの気持ちが分からなかつたです。

貴 分かんねーよ、そんなこと。想像もつかないよ。

義弘 なんでもっと早く周りに言わなかつたんですか。

未歩 たつた今、知つたんだもん、雨は痛くないって。みんな、我慢強くて、私だけ弱いんだと思つた。どうしてみんなは雨が降る日に出掛けられるんだろ、なんて強いんだと思つてたんだよ。自分で自分を「えーい、この弱虫！」って、雨が降るたんびに責め続けてた、あー、人生、もつたいねー！。

透 痛みや感覚は本人にしか分からないですからね。みんなも同じだと思つて

自分の感覚を説明しないで行動すると、「なにやってんだ」と思われてしまっわけか。

未歩 そんな端的に私の人生、まとめんなよ。

理美 あの、毛穴一本一本に針が刺さる感じって、すごく痛そうですよ。痛いよ。

未歩 でも、ナギサと、一緒の傘で帰ろうって、思ったんですね、アリサは。

未歩 うん。小学四年から、ずっと苛められるのが当たり前だったから。庇ってくれる人には、けっこう必死で縋り付こうとしてたね。

未歩 胡子 なんか信じられない。今の未歩さん見ると、苛めとかあり得ない感じ。傲慢じゃないけど、小四から中三まで、六年間、苛められ続けたよ。友達のない人間はダメなんだーって思いこんでたから、も必死。「お願いですから、あたしの友達になって下さい」とか泣きながらクラスメートにせまったりしてさ、

胡子 え、マジで？

未歩 おう。でも不思議なものでさー。頑張って友達作ろうと努力すればするほど、いじめがエスカレートしたねー。今思い出してもすごかったわ、「村八分」と「シネ」の大合唱されて。今でもよみがえるね。

胡子 ずっと忘れられないんですか、その、苛められたことって…。

未歩 うん。またねー、自閉っ子って記憶力いいんだよねー。結構、フラッシュ・バックするよ。苛めた方は忘れてるんだらうけどね。

胡子 そなんだ…。

亮一 よし、じゃ、さっきのところから、返すか。

義弘 はい、じゃ、昇降口のシーン、やります。スタンバイお願いします。

亮一 未歩さん、今、仮に、仮にただけど、さっき言った、「シネ」コール、このシーンに入れてみていいですか？

未歩 いいけど。あたしや、耳栓していい？ フラッシュ・バックしたくないんで。

亮一 もちろんいいです。（優希に）どつかあるよな、台詞入るとこ。

優希 （台本を示して）ここに入ると思いますが。「泣いてんじゃねーよ、ゾーキン。シネ、ばーか」の後に、もう一回、「シネ」を言って、「シネ」

コール。いいね。それでいこう。分かった？

亮一

それぞれ返事。

未歩は耳栓をしてコーナーに座る。

優希は台本に書き込みをする。

義弘 上手オツケー、下手、いますね。

胡子 はい。

亮一 じゃ、理美さん、このシーン、ちょっとキツイかもしれないけど、

理美 大丈夫です。
亮一 うん。じゃ、やってみましょう。こういうお芝居はちょっときついかもし

れませんが、苛める役の人たちは、いじわるを演じないでください。アリスはいつつも変なこと言う。訳分かんないことをする。むかつく。こっちにストレスを与えている。だから仕返ししたって当たり前だ。その当たり前がみんなといつしよになってエスカレートしていくということをやってみなさい。ここ、人数欲しいな。藤崎さん、田宮さん、あと優希。シネコール、入っちゃって下さい。じゃ、ま…、やってみましょう。「ナギサはあ」としと帰るんだよ。」から。

優希 直也さん、この台本を使って下さい。ここだけ、みんなと同じに言います。
直也 ありがとうございます。

義弘 (様子を見て) スタンバイ、オッケーですね。… 雨音、入ります。

義弘が音響卓を操作して、雨音。

4 劇中劇

雨音。

女子生徒1 ナギサは、あたしと帰るんだよ。行こう。

女子生徒2 寄らないでよ、ゾーキンの臭い。

男子生徒1 ノーミソまでゾーキンの臭いじゃないの。

男子生徒2 泣いてんじゃねーよ、ゾーキン。

女子生徒2 シネ、ばーか。

生徒達 シーネ、シーネ、シーネ、シーネ……

シネコールの最初には亮一も先導する。声がだんだん重なってくる。全員で、「シネ」コール。それがしだいに大きくなっていく。

秋菜 (咳くように) S、H、I、N、E、S、H、I、N、E、S、H、I、N、E…

「シネ」コールと秋菜の「S、H、I、N、E」が重なり、秋菜の声の方が大きくなっていく。

秋菜 (「シネ」に重なりながら) 輝け、輝け、輝け、輝け…!

5 稽古場

優希 とめてください…!

亮一 止めます。
優希 秋菜さん、

優希、思わず秋菜の肩を抱く。
秋菜、思わず優希に噛みつく。

胡子 うそ。
直也 うわぁ…（軽いパニックでなにもできない）。
貴 離せ、こいつ。
義弘 優希さん、

秋菜、腕を捕まえた貴を振り払おうとする。
未歩、優希が秋菜の肩を抱いたのを見て、急いで耳栓を外して秋菜に近づきながら。

未歩 秋菜から、手、離して。
貴 え？
亮一 貴、離せ！
貴、思わず手を離す。

未歩 秋菜、優希さんは苛めたんじゃないよ。
透 秋菜さん、これはお芝居です。全部、嘘です。

秋菜、優希を離す。
可南枝、そつと出て行く。

義弘 優希さん、歯形が、
理美 ちょっと見せて下さい。
優希 大丈夫だから。
未歩 痛いんだよ。
貴 そりゃ痛いですよ、こんな跡がついて、
未歩 触られると。
貴 え？

理美がハンカチで優希の手を拭いたりしながら。

未歩 急に触られたり、軽く肩を叩かれたり、撫でられたり、抱かれたりすると、
痛くて恐い自閉っ子がいるんだよね。
胡子 うそ…。

優希 ……痛かったの？

秋菜 うん。

優希 恐かった？

秋菜 うん。

優希 ごめんなさい…。

秋菜 ううん。痛い？

優希 ……うん。

秋菜 ごめんなさい。

透 (義弘に) すみません。言い忘れてたんですけど、今日、警備会社のセキユリティー・チェックの日で、四十五分、完全退出だったんです。

義弘 それ、は…、今頃言われても、

亮一 いいよ、終わりにしよう。みんな丸くなって下さい。優希、いいよ、休んで。

優希 すみません…(更衣室に入る)。

亮一 はい、じゃあ、みなさん、丸くなりましょう。やりたい人だけでいいですよ。

秋菜、透、義弘、優希、その場にいない可南枝を除いて、全員、丸くなる。義弘、透は片づけている。優希は更衣室に入る。秋菜はコーナーに行く。バッグからなにかフワフワした物を出して触る。

亮一 はい、じゃあ、上に伸びよっか。伸びて…伸びて、伸びて伸びて…はい、力抜いて。もう一度、上に伸びて伸びて伸びて…はい、抜いて。ぶーらぶーら…。色んなこと、振り落としちゃって下さい。楽に息して。ぼけーっと、口開けてねー。ぶらーん、ぶらーん…。

更衣室。

ノックがして、救急箱を持って可南枝が入ってくる。

この間も、亮一たちのクールダウンは続いている(無音化してもいい)。

可南枝 消毒、しておいた方がいいですよ。

優希 ……ありがとうございます。

可南枝 ……やりましょうか、消毒。

優希 すみません。

可南枝 いいワークシヨップでしたね。あのろうそくの。最後なんか、すごく、いい感じになったじゃないですか。

優希 あれは山室さんがうまいんです。それに順平君やみんなのイメージのおかげで…

可南枝 きっかけを作ったのは優希さんですよ。順平君に話しかけたじゃないですか。染みました？

優希

(首を振る) あたしなんかダメです。さっきだって、身体に急に触っちゃいけないなんて基本的なこと、分かってたはずなのに…包帯はいいですよ。いいじゃないですか、しときましよう。優しいんですよ、優希さん。母性が強いというか。愛情の深い母親って、時々間違っじゃないですか。でも、通じてますよ。

優希

…もっと突き放して全体を見られなきゃ、ダメですね。もっと勉強しないと。

可南枝

うんと勉強して下さい。(ちよつと笑い)私、自閉症は、個性だと思ってるんですよ。生まれつき感覚や認識の仕方が普通の人たちと違うタイプの脳を持った、ユニークな人たちだって。現代の心臓の病なんかじゃなくて、大昔からいて、モーツアルトやアンデルセンやエジソンになったり、普通の人たちにいじめられて殺されて、魔女狩りで火あぶりにされたりしてきた人なんだろうなって…。

優希

可南枝さん…、包帯、ちよつと巻きすぎかも…。

可南枝

ホントだ。理美さんみたいにうまくできないもんですね。優希さん、自閉っ子たちに関わってくださいね。彼らが愛情が分らないなんて、嘘ですから。不器用だし、形はすごく違いますけど、ちゃんと持ってますから、愛情。

優希

…ありがとつ。

可南枝

外、もう終わるんじゃないですか。みんな来ますよ(出て行くこととする)。

優希

可南枝さん。

可南枝

はい。

優希

自閉症のこと、詳しいのね。

可南枝

(お辞儀して)じゃ、また明日。

可南枝出て行く。

亮一

…骨を一つづつ立てて、頭を元の位置に戻して下さい。はい。お疲れ様。えーと、このコミュニティセンターでみんなに出会ってから、今日でちよつと一ヶ月が経ったわけだけど、この一ヶ月の間にあったことを、日常の中で、色々思い出してみして下さい。あと、みんな仕事とか学校とかあって大変だと思っけど、平日はもう少し早く集まってくれと助かります。残り二ヶ月、仲良くやりましょう。じゃ、お疲れ様でした。

全員

お疲れ様でした。

義弘

えーつと、片づけながらいいんで聞いて下さい。次の日曜、ここで道具作ります。えー、昼くらいから来てやってますんで、手伝ってもらえる方は、午後からとか適当な時間に来て下さい。以上。

亮一の話の途中で、優希、出てくる。

みんなは片づけ始めている。

秋菜が一人、部屋の隅にいる。なにかフワフワした物に触っている。優希、秋菜を放っておこうと思つができません、近づく。

突然、波音。

波音の中、秋菜と少しだけ距離を置いて、座る優希。包帯の手をあげる。

秋菜、優希を見、包帯の手をあげる。

暗闇の中、孤独があった。孤独の中から二つの包帯の手が生まれた。

言葉は生まれてこない。まだ。

暗転。

続く